

第84回麻布獣医学会 一般演題1

腹腔内に大型の血腫が存在した犬の1例

村江 留里¹, 村江 保介¹, 田中 宏幸², 中島 茂夫³¹村江獣医科医院, ²イワタ動物病院, ³中島獣医科医院

[はじめに]

腹腔内, 骨盤腔から会陰部にかけて大型の嚢胞をつくり, 排便排尿障害を起こす疾患に傍前立腺嚢胞がある。今回確定診断に至らなかったが, これによく似た状態で, 腹腔内に大型の血腫を認めた症例に遭遇したので報告する。

[症例]

症例はシェットランドシープドッグ, 雄, 13歳齢, 体重13.3 kg。肛門の左右が腫れており, 排尿回数が多く, 尿もれがあるとの主訴で来院した。元気, 食欲に異常なかった。

初診時一般身体検査所見: 左右の会陰部に5 cm × 3 cm大の軟らかい腫瘤があり, 会陰ヘルニアの状態に似ていた。

しかし, 明らかなヘルニア輪や周辺の筋肉の萎縮等は認められなかった。

また, 右腹部の膨満が認められたが, 特に圧痛はなかった。

腹部X線検査所見: 右腹部に15 cm × 13 cmの腫瘤が認められた。

また, 逆行性尿路造影により, 膀胱がその腫瘤により尾側に圧迫されていることを認めた。

超音波検査所見: 腹腔内腫瘤の壁はやや厚く, その内腔は液体と混合エコーの塊で占められていた。貯留液は赤血球の多い暗赤色の浸出液であった。会陰部腫瘤の内腔は薄黄色の漏出液で占められていた。

また, 前立腺の尾側から骨盤腔方向にかけて低エコーの嚢胞が広がっていた。前立腺と膀胱に異常は認められなかった。

血液検査所見: 特に異常は認められなかった。

以上の所見から傍前立腺嚢胞を疑い, 第7病日に試験開腹術と去勢術を行った。腫瘤は膀胱頭側に位置し, 一部大網との癒着がみとめられたが, 鈍性剥離して摘出した。この腫瘤と前立腺との交通はなかった。

また, 腫瘤の尾側から骨盤腔にむけてごく薄い漿膜に包まれた嚢胞があり, 剥離の際に容易に裂けた。この嚢胞内の液体と会陰部腫瘤内の貯留液は同様であったため, 交通している可能性が高いと思われた。嚢胞をできるかぎり除去し, 会陰部の腫瘤は貯留液の吸引除去のみ行うこととして経過観察とした。

病理検査所見: 腹腔内腫瘤は厚い線維性結合組織に囲まれた血腫で, 由来は不明であった。壁内に正常構造を保持した成熟した血管が存在することから, 元来存在する組織構造が血腫化した可能性も考えられた。

術後, 会陰部の液体貯留はみられなくなった。頻尿や尿もれも改善がみとめられ, 現在経過観察中である。

[考察]

傍前立腺嚢胞は前立腺や雄性子宮の遺残に由来するとされる。

本症例では腹腔内の他の臓器に異常は認められなかったため, 胎生管腔組織の由来の可能性も考えられた。

また, 本症例では腫瘤と他臓器との癒着が少なかった事が, 術後の早期回復につながったと思われた。